



# 双塔

カトリック新潟教会

2019年8月  
No. 375

## 悪のある世界

協力司祭 鎌田耕一郎

(悪の原因) 人生の中で最も耐え難いことの一つは、神の作品であるこの世界が限りなく美しいものであると同時に、悪に満ちているという事実である。

あらゆる種類の苦痛をもたらす物質的な悪だけではなく、この世界を泥沼のような醜さで覆う道徳的な悪がある。この問題に対して多く回答が与えられてきた。即ち、「悪霊、野蛮と未開性、文明による歪み、感覚的欲求または黄金と権力への渴望による呪縛、環境の拘束、遺伝的負荷」(アルフレド・ベンクシュ)などがその原因とされ、それを除くための努力も行われ続けてきた。だが、悪魔ばらいをし、文明の進歩を期待し(デューイ)、或いは逆に「自然に帰れ」(ルソー)と主張し、「この世の欲望を断ち切り、欲望の尽きた人」(ブッダの言葉)となるように修行し、社会環境の改革を叫び(マルキスト)、また時には、弱者を地上から抹殺してしまうような非道なことが行われたにもかかわらず、世界は依然として悪の色彩に彩られ、一層悪に苦しむ人間の姿が浮かび上がってくるのである。

ゲーテは“ファスト”の中でメフィストフェレス(サタン)の嘲りの言葉を述べている。「お前さんが、あいつらに天の光をおやりなさらなかったなら、もう少し具合よく暮らしてゆくでしょうがね。人間はあれを理性と言って…どの獣よりも獣らしく振舞うためにつかうのです。」

(恩寵への変容) 旧約のヨブ記は、ヨブに語りかける友人の言葉を通じて悪の理由をあげている。第一に苦しみは罪に対する神の罰であるという因果応報の考えであり、第二は悪を好み破壊をよろこぶサタンのねたみの仕業であるとし、第三に苦難は神がその子らを鍛錬し浄化するための教育的手段であると教えている。十字架を知らないヨブは「私は知ります。あなたはすべての事をなすことができ、また、いかなる思し召しでもあなたにできないことはないことを」(42・2)。

イエスは苦しみに対する悲しみ、嫌悪、恐怖をかくされなかったし、また、人間の苦しみに深い共感を抱かれた。しかし、イエスはその十字架を通じて、神の御子の苦しみと死をもって償わねばならなかった罪こそ、最大の悪であることを教えられたのである。

救いは全うされたが、人間は弱さ、苦しみ、罪、死から解放されなかった。しかし、イエスが生まれつきの盲人を癒されたとき、それが誰の罪の結果でもなく、「この人によって神のみわざをあらわすためである」(ヨハネ9・3)といわれたように、本来罪の結果として世にもたらされたものが、いまや、神の恩寵と祝福を招く汚れなき犠牲に変容する恵みが与えられたのである。

私たちは救いの喜びを表わす唯一のしるしである十字架のもとに、「毒麦」にとっては戒めであり「小麦」にとっては希望である“刈り入れ”の日を待ち望みつつ歩みつつけるのである。